

1. 分科会参加概要

分科会では5本のレポート報告があった。参加者は8名（現地5名、オンライン3名）で、参加者が年々高齢化及び減少傾向があるとともに、分科会での発表内容が、他の分科会での内容にも関連することから、他の分科会への参加もある。組合員・未組織若手教職員・教員志望の学生等参加者の組織化が求められる。

2. レポート報告内容

①「技術・家庭科の学力とテスト」 江差町立江差中学校 内糸 俊男

地方の人口減少と義務教育の課題、義務教育学校への移行、管内の奥尻高校での島内からの進学者がゼロという課題がある。

一方で特別支援学級に在籍している生徒は年々増加している。特別支援学級から特別支援学校への進学が少なくなり、高校への進学も増加している。

技術・家庭科を学ぶことで身につけてほしい力として、『いっぼんの鉛筆のむこうに』（谷川俊太郎著）を取り上げ、技術・家庭科の授業で学ぶことによって、一個の商品からたくさんのおもしろいことをイメージすることができる力を持った人になってくれることを願っている。イメージすることができる力が技術・家庭科の学力の一部なのではないかと述べる。

身につけてほしい力を身につけてもらうために欠かせないこととして、究極を言えば、技術の授業が楽しかったなあというイメージが残ってさえいればよいのではないだろうかと考えている。

質疑・課題として、「試験の点数と本質的な学びが結びついていない」という現状がある。細かな知識はどこまで覚えておく必要があるのかという疑問が出された。

大学生に中学校で学んだ技術をどれくらい覚えているかを聞いたところ、「覚えていない」学生が多い。ラジオを作ったことや、教科外の先生が多いことが上げられた。進学校における技術教育の定着度などを調べる必要性もあるのではないかという意見があった。

い。

今後、理科などとの結びつきの必要性。義務教育学校は設置すると補助金が出るが、人は増えないという課題があり、都市部でも増えている。また、中学校の複式学級が増えている。一方で、免許外・教員数の減少があるが道内ではいまだに免許外が多い。

高校でも、スポーツ特待が増えてきている。地域の特性から、授業料無償化の影響も有一定数は函館へ流出している。

かけない子、読めない子はものを作れなかったり、形が捉えられないことがある。立体系の書き始めや立体系を書けない生徒がいる。同じ図を模写できない生徒もいる。

② 「今、桂陽高校がおもしろい ～課題研究で地域を創る～」

北海道網走桂陽高校 山下 正浩

2024年度からの2年間の課題研究の実践報告。課題研究では、網走市や網走桂陽高校の課題を解決するために、商業科、事務情報科が積極的に地域に関わりを持ち、連携を図ることで、地域の活性化に繋がり、本校の取り組みを発信出来ると考えている。

「商店街活性化～A p t 4に賑わいを」「続・商店街活性化」についての実践報告。この研究には、地元ロイヤルティ（地元の企業や商店街に対する支持や愛着）を育むことや、「魅力的な街づくり」も含まれている。今後も課題研究の授業を展開するが、「地域」をキーワードに、課題研究以外の授業とも関連させながら、教育課程を考えたいと思う。

2024年は、網走駅前から中央商店街までの通りは、シャッター街で閑散としているが、かつての賑わいを取り戻したいと多くの市民が思っていることから研究をすすめた。

コワーキングスペース「ナシタ」で7月に一日限りのカフェ『桂陽カフェ (POP-UP CAFE)』を実施。9月に Apt 4 で動画を撮影し、Instagram にあげた。

10月下旬、毎年3学年が「市議との交流」を行っている際に、「請願」を知り、11月中旬、網走市議会事務局を訪問し、陳情・請願について説明を受けた。同時に「市長への手紙」にもとりくんだ。12月上旬、議会（議場）で請願の趣旨説明をする機会をいただいた。高校生による議会請願は記録にないことであり、大きく報道された。請願は、全会一致で採択された。

2025年度は、市の今年度の予算にアプトフォー関連予算として、60万円が計上された。①「駄菓子屋の開催」として10月1日～11月1日まで全10回開催。②「スタンプラリーの導入」としてLINE上で開催しスタンプ5個で100円引きクーポン、スタンプ15個で500円引きクーポンという設定にした。③「空き地の利用」として、市役所の方に提案した。

課題研究の授業は、仮説を立て、調査、検証し、解決策を提案する。この繰り返しのとりくみである。たくさんの大人たちと関わることによって、生徒の成長とともに大人にも新しい発想が生まれると考える。関わる大人たちは、優しく、丁寧に、喜んで、そして一緒に考えてくれる。このような体験ができることがこの授業の最大の魅力だ。とまとめた。

③ 「アウトプットミッション」 北海道滝川工業高等学校 清水 正貴

工業高校に勤務し、「自己肯定感が低い、学力が乏しい、人間関係がうまく築けない、諦めがはやい、すぐに出来ないと言う...」という生徒が増えているが、これは「伸びしろがある!!」と考える事ができる。出来ないことが多い、知らないことが多い。それはやり方がわからない、しっかり教えてもらっていないだけ。だからこそやり方を工夫したり、丁寧に教えてあげたりすれば出来るようになると考えている。

「アウトプット大全」という書籍を参考にし、アウトプット（書く・話す・行動する）を行うことで、生徒の様々な成長が見られるようになった。

実習中での「書く」はレポート。「行動する」は実際の作業。「話す」を「その日おこなった実習の内容を親に話し、それについて評価をABCでつけてもらう」という取り組みを行った。

自分の言葉で話す事によって、就職試験の面接試験での対応や、親に工業高校での実習を理解してもらう目的で実施した。実施当初の生徒は「ええー」「めんどくさー」「親仕事でいないし」と言っていましたが、多くの生徒は、親に聞いてもらい、コメントも3割程度記入があり、工業高校の教育についても理解が深まっている。あえて紙ベースで実施することで、表現する力を身につけさせるようにしている。

学力の定着という意味では、アウトプットは非常に有効であると考えます。今後はこれを資格試験の指導にうまく活用できれば良いと考えている。

④投票に行くぜえ~!! ~“働く”高校生の「一票」を考える~ 北海道苫小牧東高校 高野 正

2025年7月に実施された参議院議員通常選挙に向けて、定時制4年生の担任として、学校行事で商業施設を訪れた際に期日前投票を実施しており、期日前投票を呼びかけた実践報告。

生徒の現状として、コロナの影響もあるのか、学校に登校するモチベーションが低く感じられる。また、15名入学した生徒も4年生現在で4名となっている。

選挙公報やポータルサイトの活用などを促し、「この国をどんな国にしたいのか。それは、自分のことは自分で決めることと同じです。つまり、私たち自らが創り上げるものです。だから、社会の問題を自分の生活の問題として捉え、考えて、一人一人が主体的に行動することが求められます。こうした人こそが「平和と民主主義の主人公」なのです。みんなも“主人公”になってほしい。」と願っているとまとめた。

⑤「高校3年生が考える選択的夫婦別姓」 北海道岩見沢緑陵高校 倉部 静雄

「ビジネス法規」の授業で、選択的夫婦別姓について生徒の考えをまとめた実践報告。

資料として、新聞6紙の社説（読売・朝日・毎日・産経・日経・北海道）を配布し、一通り、賛成・反対のどちらにもとらえられないようにバランスをとったつもりで説明を行った。また、2つの関連するホームページ（日弁連・法務省）も印刷して配布し、引用箇所を線で引かせて、記述する形式で行った。社説は「社説 選択的夫婦別姓 ○○新聞」でインターネットからダウンロードして配布を行った。

生徒には、150文字以上300文字以下でまとめて提出をさせた。その結果、11名（男子7名、女子4名）の生徒のうち反対5名、賛成6名となった。

反対する生徒は、家族の一体感が薄れる。家族制度が崩壊する。子どもが片方の親と別姓になる「強制的親子別姓」が発生する。緊急時の親子・夫婦関係の確認ができない。手続きが面倒などの意見が述べられた。

賛成する生徒は、多様な価値観がある。仕事に影響している。女性の負担を減少させる必

要があるなどが述べられた。

SNSやAIの急速な発達とともに、「フィルターバブル」という自分の都合の良い情報ばかりが出てくるようになってきている中で、積極的に「反対の意見」や「批判的な意見」を入手する方法を取らなければ、偏ったものの見方しかできなくなる。視野を広げることをどのように変えさせる、考えさせるかが課題であるとまとめた。

3. 今後の課題

参加者の組織はもちろんであるが、他の分科会との交流なども必要である。北海道での職業教育の実践報告が少ないのが現状である。中高大の縦の繋がりを大切にしていける必要がある。私立高校や広域通信制の問題など枠を超えた議論も求められる。